

外国語教育メディア学会 (LET)  
関西支部 2013 年度秋季研究大会  
特別シンポジウム・特別基調講演

発表要項集



日 時： 2013 年 10 月 12 日 (土) 10:00~17:10

場 所： 関西大学 (千里山キャンパス)  
Kansai University (Senriyama Campus)  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35  
<http://www.kansai-u.ac.jp/index.html>

主 催： 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部  
<http://www.let-kansai.org/>

事務局： 〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1  
近畿大学経済学部 菅井康祐研究室内  
Tel. 06-6730-5880 (内線：7070)  
E-mail: [kansaillet@gmail.com](mailto:kansaillet@gmail.com)



# プログラム

- 9:30-15:30 受付■ 第1学舎5号館 (E棟) 3階
- 10:00-10:15 開会行事■ 5号館 (E棟) 5階 E501教室  
司会◆吉田 信介 (関西大学)  
挨拶◆竹内 理 (会場校・関西大学外国語学部長 外国語教育学研究科長)  
挨拶◆若本 夏美 (支部長・同志社女子大学)
- 10:20-12:00 【特別シンポジウム】 5号館 (E棟) 5階 E501教室  
「英語で授業をする」  
パネリスト ◆阿野 幸一 先生 (文教大学)  
津久井 貴之 先生 (群馬県教育委員会)  
櫻井 譲 先生 (関西大学中等部・高等部)  
コーディネーター◆溝畑 保之 (大阪府立鳳高等学校)
- 9:30-16:00 業者展示■ 5号館 3階
- 12:00-13:30 昼食■ 1号館 (A棟) 1F「不二家食堂」など  
運営委員会■ 5号館 (E棟) 3階 E301教室
- 13:30-15:10 研究発表・実践報告・教材開発 ①13:30-14:00 ②14:05-14:35 ③14:40-15:10
- 第1室■ 5号館 (E棟) 3階 E306教室 司会◆今井 由美子 (同志社女子大学)
- ① <実践報告> イタリア語とフランス語の授業における「フラッシュ型例文・対訳提示ツール」  
の実践例と可能性  
堂浦 律子 (京都外国語大学・非常勤)、井上 昭彦 (京都外国語大学・非常勤)、  
黒田 恵梨子 (京都外国語大学・非常勤)
- ② <研究発表> 日本人中学生の動機減退に関するケーススタディー  
宋 美香 (大阪市立佃中学校)
- ③ <研究発表> Self-evaluation system within a blended learning environment: Helping  
students improve learner motivation in a university EFL course in Japan  
Kate Maher (京都造形芸術大学・非常勤)
- 第2室■ 5号館 (E棟) 3階 情報処理教室 A 司会◆山本 勝巳 (流通科学大学)
- ① <研究発表> 中学生英語学習者を対象とした関与負荷仮説の検証  
宋 由香 (大阪市立玉津中学校)
- ② <研究発表> 小学校英語活動でICTを活用した教材開発: 'WHERE'S THE FISH?' by Taro  
Gomi の絵本のアニメーション教材化  
真崎 克彦 (兵庫教育大学附属小学校)

- ③ <教材開発> 教員向け授業支援 iPad アプリ “Yubiquitous Text” の開発  
樋口 拓弥 (関西大学・学部生)

第3室■ 5号館 (E棟) 3階 情報処理教室 B 司会◆橋本 健一 (近畿大学)

- ① <研究発表> 日本人英語学習者による絵描写発話タスクにおける繰り返し効果：ポーズに注目して  
杉浦 香織 (立命館大学)、泉 恵美子 (京都教育大学)、  
斉藤 倫子 (関西学院大学・大学院生)、堀 智子 (国立東京工業高等専門学校)  
森 庸子 (同志社大学)
- ② <研究発表> 英語および日本語のリズムの違いと共通点：音声教育への示唆とともに  
東 淳一 (順天堂大学)
- ③ <教材開発> Casual Transcriber を使った音声教材の準備と提示  
今尾 康裕 (大阪大学)

第4室■ 5号館 (E棟) 3階 情報処理教室 D 司会◆今井 裕之 (関西大学)

- ① <研究発表> 偶発的英語句動詞学習 “PAC 分析を通じて”  
山形 悟史 (大阪教育大学・大学院生)、吉田 晴世 (大阪教育大学)
- ② <実践報告> 大学の英語ライティング授業における TBLT の導入  
浦野 研 (北海学園大学)
- ③ <実践報告> 学習者の自律的な推敲を促す自動添削ツールの検討  
大澤 真也 (広島修道大学)

15:10-15:30 休憩

15:30-17:00

**【特別基調講演】** 5号館 (E棟) 5階 E501 教室

**Research on Form-focused Instruction: Issues and Challenges**

講師 ◆Dr. Hossein Nassaji (University of Victoria)

講師紹介◆名部井 敏代 (関西大学)

17:00-17:10

閉会行事■ 5号館 (E棟) 5階 E501 教室

司会◆菅井 康祐 (事務局長・近畿大学)

挨拶◆野村 和宏 (副支部長・神戸市外国語大学)

17:20-19:20

懇親会■ 1号館 (A棟) 1F 「不二家食堂」

司会◆氏木 道人 (関西学院大学)

挨拶◆杉森 直樹 (副支部長・立命館大学)

## Research on Form-focused Instruction: Issues and Challenges

Dr. Hossein Nassaji (University of Victoria)

### Synopsis

Recent theory and research in second language acquisition (SLA) has strongly advocated the necessity of attention to form for successful L2 acquisition. Recently, major advances have also been made in our knowledge and understanding of form-focused instruction and its contributions to language acquisition. However, many questions still remain about how form-focused instruction works and what factors mediate its effectiveness.

In this talk I will provide an overview of the major questions and issues that SLA researchers are currently investigating in this area and their main conclusions. I will also examine the various research perspectives that they have employed (including cognitive, discourse-based, and socio-cultural), as well as the challenges that they have faced in doing so. I will conclude with the implications of this examination for L2 classroom research and also attempt to identify new avenues for future research.

### Bio

Hossein Nassaji is Professor and Chair of the Department of Linguistics, University of Victoria, Victoria, BC, Canada. His teaching and research interests include, form-focused instruction, corrective feedback, and L2 classroom discourse. His research has been published in numerous leading journals in the field including *Language Learning*, *Applied Linguistics*, *Applied psycholinguistics*, *Modern Language Journal*, *TESOL Quarterly*, and *International Review of Applied Linguistics*.

His recent books are *Teaching Grammar in Second Language Classrooms: Integrating Form-Focused Instruction in Communicative Context*, 2010, Routledge (with Sandra Fotos); and *Form-Focused Instruction and Teacher Education: Studies in Honour of Rod Ellis*, 2007, Oxford University Press (with Sandra Fotos). He is the winner of the twenty-first annual Kenneth W. Mildener Prize of Modern Language Association of America (with Gordon Wells) and also the recipient of 2012 Faculty of Humanities Award for Research Excellence, University of Victoria

## 英語で授業をする

阿野 幸一（文教大学）

### 英語で授業－生徒を主役にするために－

#### 1. なぜ英語で授業なのか

- ある大学教員の意見から、「英語で授業」の意味を考える  
「高校での英語の授業は英語で行うことになった以上、ラジオ講座『基礎英語』も英語で放送すべきである」 賛成？ 反対？
- 授業で英語を使うのは（使ったほうがいいのか）？ 教師？ それとも 生徒？  
英語（という言葉）は使わなくても力がつくものか？
- 日本語で 100 パーセントの説明、それとも 英語を使って 70 パーセントの理解？  
教師が説明すれば生徒が英語を身につけるという前提は成立するか？  
⇒「あんなに説明したのに…」  
身につける(learn)ことができるのはどちらの学習スタイルか？  
教師の Teaching から生徒の Learning へ
- 授業を通して生徒の頭に残したいのは？ 日本語？それとも 英語？  
⇒授業のゴールを見据える

#### 2. 「コミュニケーション英語」を生かすために

- 技能別科目の反省を生かし、4 技能（5 技能）統合型の指導へ  
⇒ translation を間に置くのではなく、thinking を

#### 3. スローラーナーにこそ英語で授業を

- 英語が苦手（嫌い）になった理由は？  
⇒「今までに受けた最悪の英語の授業」－阿野ゼミ生のレポートから
- 「英語が嫌い！」という生徒の心の中は？
- 教育困難校での指導＝生徒の動機づけ＋コミュニケーションの楽しさ
- 阿野の初任校（教育困難校）での経験から－「英語で授業」で変わる生徒  
英語を使って失敗⇒日本語を使って失敗⇒英語を使って成功？

#### 4. 大学入試センター試験

- 試験監督をしながら…
- 日本語を通した内容理解のトレーニング→80 分で 3500 語をこなせるか？

#### 5. 生徒のための教師の英語

- 生徒の口から英語を引き出すための英語  
⇒日本語でも受け入れる－まずは生徒からのひと言を！
- 生徒を動かすための（活動に導く）英語  
⇒クラスルーム・イングリッシュ－これならわかる
- 生徒のインプットになる英語

⇒場面を伴ったインプット

#### 6. 英語で授業を進めるために

- 「日本語で教えるか」「英語で教えるか」の議論に終止符を  
⇒ “All English”の呪縛からの脱出を
- 日本語の併用を避ける
- 言葉としての（広い意味での）クラスルーム・イングリッシュを  
⇒インタラクションの道具として—教室をコミュニケーションの場面に
- 答え方をガイドする
- フィードバックで工夫する

## 英語で授業をする

津久井 貴之（群馬県教育委員会）

### 英語指導観のパラダイム・シフト

#### 2. 1 「授業は英語で行うことを基本とする」についての考え方

英語教育の改革が叫ばれている今日、教師自身の英語力の向上、英語で行う英語の授業や言語活動の指導方法に関する話題が様々な場面で取り上げられている。私たち教師が求められていることは何なのか。思考停止をせずに考えてみる必要がある。これまで多くの先生方が「授業は日本語で行うことを基本としてきた」のはなぜか、また、「授業は英語で行うことを基本とする」ことの目的は何か。そして、この転換期にこれまで以上に大切になってくることは何か。

#### 2. 2 科目と科目名（から考える paradigm shift）

科目名が新しくなったから全てがうまくいくわけではない。旧課程で起きていたと思われることは、新課程でも起きうる。旧課程では、その目標とする技能の一部だけを切り取って曲解したり、科目の目標よりも教える側の都合で指導内容や使用教材が決まったりしてしまうことあった。「英語を技能によって切り分けない」という発想の転換の基で、「コミュニケーション英語」や「英語表現」ではどのような力の育成や活動に重点を置いていけばいいのだろうか。

#### 2. 3 生徒の学力や実態（から考える paradigm shift）

中学校の内容が身に付いていない生徒には、難しすぎるから『コミュニケーション英語』で求められている言語活動や「英語の授業は英語で」をあきらめるという発想は、ピアノを弾くのが下手だからピアノを取り上げ、教本だけ与えるというレッスンと同じである。アルファベットがおぼつかない生徒からアルファベットや英語自体を取り上げたらもはや何も残らない。「生徒の学力や実態」によって「英語の授業だけど基本的に日本語で」でよいはずがないのは「自明の理」であるのに、「生徒の学力や実態」が「基本的に英語で行う英語の授業」を妨げる原因には何があるのだろうか。

#### 2. 4 大学入試について

私たち教師は、大学入試の議論や変革のニュースに踊らされることなく、英語の運用力を伸ばすことに集中すべきではないだろうか。英語の高い運用力を身に付けた学習者が、逆に大学入試で不利になるような大学入試問題が果たしてとれだけあるだろうか。

#### 2. 5 英語教員へのアドバイス

私たち教師が英語力の向上に関わって、週3～4日で3年間、近くの大学で研修を受けなければならないとしたら、どんな研修内容がよいか。そこにどんな授業がよいか、の答えがあるような気がする。技能を高めてくれるものであってほしいし、家で更に自分で学習するとしたら何をするとよいか教えてほしいし、研修でやっていないことをテストしないでほしいし、時折今の自分のやり方や伸び具合が心配になったら相談を聞いてくれて意欲が更に高められるようにしてほしい。私ならそう思う。今の私の立場を考えると自省も込めて、学習者の視点や心理を忘れないようにしたい。



## 2. 6 生徒へのアドバイス

もし、今私に生徒がいたら、時に言葉で直接、時に授業を通して間接的に伝えていきたい。

「英語を学習することでいろいろな考え方や経験に触れてほしい。自分の思いや意見を伝え合うことの大切さや楽しさを実感してほしい。英語の力はこうした経験や実感の中で伸びていく。そして、自分で英語を学び続ける姿勢を身に付けてほしい。やがて英語を通して何かを学ぶ学習者に成長して行ってほしい。そのために今日の授業やペアワーク、グループ活動や家庭学習があるのだ。伝えたい思いや考えをつくり、伝え合うことで学び合うことのある授業を一緒につくりたい。“It’s a challenge, but I will try my best and I must be the change I want to see in my classroom.”」

## 英語で授業をする

櫻井 譲（関西大学中等部・高等部）

「生きた英語」の学び、学校の教育活動における英語の活用

### 1. 「授業は英語で行うことを基本とする」について

何を、どのように教えるか。技能教科（科目）として「生きた英語」、英語の知識ではなく、英語そのものの学びを教えつつ、生徒が身につけたその学びを発展させることができる自律した学習者を育成する。そのために、授業における指導手順とそれぞれの指導の在り方をしっかり考え、それぞれの活動が「コミュニケーション能力の育成」に意味ある授業を考え、学校行事などで英語を活用する機会を保障したい。

### 2. 高等学校「コミュニケーション英語」「英語表現」などについて

中学校の基礎・基本を土台として、4技能を総合的、統合的に指導していく。普段の言語活動の組み合わせは「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」「聞き・話すこと」「聞き・読むこと」「聞き・書くこと」「話し・読むこと」「話し・書くこと」「読み・書くこと」「聞き・話し・読むこと」「聞き・話し・書くこと」「聞き・読み・書くこと」「話し・読み・書くこと」「聞き・話し・読み・書くこと」の15通りあることを踏まえ指導にあたりたい。

### 3. アルファベットがおぼつかない生徒、進学校の生徒の英語授業について

ほとんどの生徒は英語の入門期において「英語が話せるようになりたい」と願って期待に胸を膨らませている。ところが、ある教室ではその願いが数カ月で破れてしまう。

日本語と英語の違い、例えば語順、発音などの違いを認識させ、日本語に訳すことだけでは理解したことになること、英語を話せるとそれが何に役立つかなども伝えていく必要がある。授業は常に生徒の実態に応じ、指導の軌道修正を行いながら、伏線を張った無駄のない授業を構築できる教材・学習材を準備しておくべきである。

### 4. 大学（高校）入試について

「グローバル化」が教育のキーワードとなっている今日であればこそ、志望校への大学合格が生徒にとって英語授業のゴールであってはならない。前校種の学習内容を踏まえ、次のステップへ生徒を導かなければならない。そのためにも小学校での「外国語活動」と教科としての中学校、高校の「英語」の授業との連携は不可欠であり、中学校の教員は小学校の児童が何を学び、高校の教員は中学校の生徒が何を学んできているか。少なくとも全校種の『学習指導要領』には目を通しておくべきである。

また、次の校種への進学にあたり授業の評価を業者に委ねることに疑問をもつ教員もいるが、専門家の作成したテストは大いに活用し、指導と評価について振り返り、常に授業改善を心がけ生徒へのフィードバックを行うべきである。

## 5. 英語教員へのアドバイス

「英語で授業する」を実践するために、すでに「良い授業」を実践しているオーラルワーク中心の授業を参観したり、市販されている DVD を視聴するなどして、その指導技術を吸収することを重ねたい。授業の活動のねらい、活動と活動の関係など、その良し悪しが自ら指摘できるようになると「良い授業」が見えてくるだろう。

また、教科書を予習してきた生徒にとって、退屈な授業とならないように教材が映像化できるように具体的例を提示しながら生徒とともに授業を創っていきたいものである。

## 6. 生徒へのアドバイス

英語による「コミュニケーション能力の育成」にあたっては、高い英語力を身につけるだけでなく、他の教科で得た知識をしっかりと身につけるとともに、ジェスチャー、アイ・コンタクトなどを含め、話し手の意図を相手に伝えることができるよう思考力、表現力なども大切な要素となることを伝えていくべきである。人がコトバを使用していくには数千時間以上ものインプット、アウトプットがあつてのことであることも伝えておきたい。

## イタリア語とフランス語の授業における「フラッシュ型例文・対訳提示ツール」の実践例と可能性

堂浦 律子（京都外国語大学・非常勤）、井上 昭彦（京都外国語大学・非常勤）、  
黒田 恵梨子（京都外国語大学・非常勤）

キーワード：多言語教材 教材提示 初修外国語

本発表では、報告者の属する多言語プロジェクトで開発された「フラッシュ型例文・対訳提示ツール」を、イタリア語およびフランス語の授業で導入・活用した実践例とその学習効果について、3名それぞれが報告する。

このツールは、授業担当者が Excel で作成したデータベースをもとに、例文とその対訳を FileMaker 上で提示するものである。最も汎用性が高い利用法は、効率的な板書として用いる場合である。聞き取り練習をする際にツールを利用すると、穴埋め文から正解文へのすばやい切り替え、さらに対訳文の追加提示と、テンポよく練習を進めることができる。ツールを使ったイタリア語クラスでは、同様の学習内容と効果を保ったまま、通常の板書時に比べて2割から3割時間を短縮でき、その結果、十分な余裕を持って文法事項や表現を定着させることができた。集中力を必要とする聞き取り練習においては、ツールの特性であるすばやい提示機能が十分に効果を発揮するように思われる。

この他にも、「フラッシュ型例文・対訳提示ツール」には様々な可能性がある。なかでも復習として利用した時に効果が大きい。ツールにはテキストで学習したイタリア語例文とその対訳を入力しておく。授業では、対訳のみを提示して、学習者が例文を言う。その際、ツールの機能を用いて段階的に練習を行うことができるのである。すなわち、1) 一語ずつ確認しながら言う。2) ゆっくりでいいので最後まで例文を見ないで言う。3) 例文を見ないで滑らかに言う。この練習では、1) で「作文」という過程を経たうえで記憶することにより、暗記に基づく単純な反復口頭練習に比べて、より確実に定着させることが可能である。また、「見ないで言えた」という学習者の満足感も大きい。以前から、このような段階的学習法が効果的であるとの認識はあったが、板書やパワーポイントを用いた従来の方式では表示（書く）と非表示（消す）を繰り返すのに時間がかかるため、多く取り入れることができなかった。この「フラッシュ型例文・対訳提示ツール」は「消す」と「表示」およびその切り替えを瞬時に行えるため、短時間で効率的な練習ができる。

一方、フランス語の授業での「フラッシュ型例文・提示ツール」の活用は、基本的にはイタリア語と同様だが、その言語特性の違いにより、言葉の教え方、ツールの使い方も多少異なってくる。やはり復習の場面で使うことが多いが、発音の確認（フランス語は語末の子音字は発音されない、連音が多くあるなど、英語に慣れた入門者には戸惑うことが多い）、和文仏訳、仏文和訳という流れの中で、どのようなツールの使い方が効果的であるか、その実践例を示しつつ考察する。さらに、動詞活用の記憶定着を目的として開発された「動詞変化形提示ツール」との併用例についても紹介する。

## 日本人中学生の動機減退に関するケーススタディー

宋 美香（大阪市立佃中学校）

キーワード：動機減退 日本人中学生 ケーススタディー

動機は外国語学習においてもっとも重要な要因のひとつである。しかし、英語学習開始初期である中学1年生の時期に、多くの生徒の動機が減退してしまう。英語学習における動機減退に関する研究は、Dörnyei が行った研究をはじめに注目を集めるようになり、日本のEFL環境での研究も行われてきている。しかし、これまでの研究は大学生以上を対象とし、中学生の動機減退についての研究はほとんど行われていない。また、近年、動機づけ研究のなかで動機づけの変動を調査する必要性が主張されているが、動機減退の要因のみを調査しているものが多い。

### 目的

そこで、本研究では中学1年生の1年間に焦点をあて、以下の4点の研究課題を設定した。(1) 動機減退の状況はどのように変化するのか (2) 中学1年終了までに、中学生の動機はどのように減退するのか (3) どのような要因が動機減退に貢献しているのか (4) どのような学習環境が動機減退に貢献しているのか。

### 方法

中学2年生の男女各1名ずつに対してインタビューを行った。データ収集の道具として、過去1年間の動機を回顧的に折れ線グラフとして記入するチャートを使用した。その後、そのチャートをもとに半構造化インタビューをそれぞれの対象者につき2回実施した。インタビューデータの分析は質的データの分析法であるKJ法を用いて行った。

### 結果と考察

インタビューデータから動機減退に影響した要因のグループ編成を行った結果、6つの要因として集約された。(1) 授業や学習内容から生まれる英語への否定的感情 (2) 学習行動 (3) 教師の行動、態度、教え方への認識 (4) クライスマイトやその他の人に対する認識や感情 (5) テストへの認識や感情 (6) クラスの雰囲気に対する認識。結果と考察を述べるにあたり、対象者二人のそれぞれのケースごとに、動機減退が起こった時の要因の関係図を作成し、叙述化を行った。すると、すべての動機減退が起こった時点に関して、ただひとつの要因が動機を減退させるのではなく、その他の要因が複合的に絡み合い、そのときの学習環境のなかで動機減退を引き起こしていることが確認された。さらに、動機減退の状況は、時間の変化に伴ってダイナミックに変化するということがわかった。このことから本研究では、動機減退とは、動機減退要因とその背景にある環境が引き起こすものであり、動的にとらえるべきであるという示唆を提示した。本発表の最後には、対象者二人に共通していた点や、結果に基づいて中学校の教育現場において教師が考慮すべき点についても述べる。

# Self-evaluation system within a blended learning environment:

Helping students improve learner motivation  
in a university EFL course in Japan

Kate Maher (京都造形芸術大学・非常勤講師)

Key Words: learner motivation, self-evaluation, blended learning, university, EFL

This paper reports on the utilisation of a student self-evaluation system within a blended learning environment in a first year university compulsory EFL course for non-English major students, to encourage self-reflection to support students to study more outside of class.

The goal of the self-evaluation system is to prompt students to reflect on their learning, so as to utilise their study time more effectively, and to increase their motivation. Through this system students are guided in the forming of learner goals. This in turn should motivate students to sustain their study independently outside of class and to optimise their use of face-to-face time.

Two studies were carried out to answer the following research questions:

Study 1: Would the blended learning course improve student motivation?

Study 2: Would the self-evaluation system help improve the students' motivation in the blended learning course?

From the post-course evaluation for Study 1, the results show that after using the online or paper-based versions of the materials, there were few significant differences between the blended learning and control groups. The results suggest that even if the materials were more dynamic than the paper-based materials, the blended learning group were perhaps not comfortable with these materials as they reported lower efficacy scores for listening, reading and speaking skills, which may have had an effect on their performance and being able to reach their goals for the course. Furthermore, the blended learning group showed lower levels of effort to use the online materials.

The pre and post questionnaires for Study 2 also showed few significant changes, however from the results it appears that through using the self-evaluation system the participants became more aware of their study habits, and made an effort to create a non-distracting study environment and tried to manage their independent study time outside of class. In regards to inside of class, the results showed that while many students are more motivated to study if a teacher is pushing them, there was a significant change in heteronomy, indicating less reliance on the teacher to feed them answers. There was also a significant increase in self-efficacy, with students believing they have adequate skills and can perform well in the EFL course.

It can be claimed that through using the self-evaluation system, students became more aware of their learning behaviour and took steps towards improving it, particularly environment and time management outside of class. It is important for instructors of first year university EFL courses to support the transition from high school to university in terms of helping them to adapt to a different learning environment, a new routine and expectations.

## 中学生英語学習者を対象とした関与負荷仮説の検証

宋 由香 (大阪市立玉津中学校)

キーワード：語彙学習 中学生 involvement load hypothesis

本研究の目的は、中学生を対象として付随的語彙学習に関する仮説である関与負荷仮説 (involvement load hypothesis) を検証することである。関与負荷仮説は Laufer & Hulstijn (2001) によって提唱された仮説であり、単語を覚えるためには、タスクを行う際にその中に含まれる単語と深く関われば関わるほど単語をよく覚えるとされている。この仮説では、単語との関わり方の深さに影響するものとして3つの要因が挙げられている。1つはタスクを行う動機に関わる必要性 (need) であり、3つの度合いがある。2つ目は認知に関わる検索 (search) で、単語の意味を探す必要があるかないかという2つの度合いがある。3つ目は評価 (evaluation) で、目標語と他の単語を比較する、統語について考えるなどの3つの度合いがある。これらの3つの要因の組み合わせの度合いによって、タスクの関与負荷 (involvement load) が決まり、この負荷が高ければ高いほど学習者はタスクの中に含まれる目標語をよく覚えるとされている。これまでに関与負荷仮説の検証研究が行われており、Hulstijn & Laufer (2001) や Kim (2008) などの、リーディング、Gap-fill、作文の3つのタスクを比較した研究が4つがある。仮説は、どの研究においても全面的、部分的に実証されているが、対象者のほとんどが上級の学習者であった。

本研究では、英語初学者である中学生を対象に仮説を検証した。中学校では、学習指導要領の改訂によって教えるべき語彙数の目安が900語から1200語に増加し、知識・技能を活用する言語活動も重視されるようになった (文部科学省, 2008)。この状況下、中学校では、語彙指導の重要性が増すとともに、語彙を実際に使用しながら学ぶなどの付随的語彙学習の機会も増加すると予想される。対象者は大阪市内の公立中学校の3年生3クラス98名とし、先行研究に倣って7つの同じ目標語を含むリーディング、Gap-fill、英作文の3つのタスクを対象者間計画で実施した。単語テストは、単語の意味を答えるものとし、タスク直後と11日後の2回行った。その結果、タスク直後のテストにおいては、リーディングと英作文の間にのみ有意差があり仮説は部分的に立証され、関与負荷が最も高いタスクである英作文と、最も低い負荷であるリーディングとの間にのみ有意差が見られた。しかし、11日後のテストでは、どのタスクにおいてもほとんど目標語を覚えておらず、タスク間に有意差はなく仮説は立証できなかった。中学生を対象とした場合、タスク直後においては関与負荷が高ければ語彙学習が促進されるが、時間の経過によって負荷の高さの効果は弱まる可能性が示された。

## 小学校英語活動で ICT を活用した教材開発： ‘WHERE’S THE FISH?’ by Taro Gomi の絵本のアニメーション教材化

真崎 克彦（兵庫教育大学附属小学校）

キーワード：ICT 教材開発 小学校英語活動 アニメーション チャンツ

小学校に外国語活動が完全実施されてから、3年目を迎えた。小学校現場では、移行期間にみられたような教員の外国語活動の指導に関する不安は、薄れてきているようである。一方、すべての小学校教員が、外国語指導の専門性が十分であるとは言えず、適切な外国語指導がなされているかを懸念する声も聞かれている。しかしながら、当面の課題である、小学校教員の指導力の向上については、一朝一夕に改善することは難しく、ICT 機器の有効利用を一層推進していくことが、重要であると考えられている。

本研究では、五味太郎氏の「きんぎょがにげた」の英語版(英文では、“WHERE’S THE FISH?”)をアニメーションにし、児童が楽しく英語音声に慣れ親しむことができる教材開発を行うことを目的とした。五味太郎氏の本作品を取り上げた主な理由は、次の3点である。

- ① 金魚鉢を飛び出した金魚が、家の中を探索し、仲間の金魚と一緒にになれるまでの移動の過程が、色鮮やかな絵の中で展開しているので、児童は創造力を駆り立てながら、興味深く学ぶことができる。
- ② 英語版での使用言語は主に、‘Where’s the fish?’ と ‘There’s the fish.’ の繰り返しで構成されており、何度も聞いたり、言ったりする中で、自然に言語の定着を図ることができる。
- ③ ダイアログ形式になっており、児童に言語が身につけてきた段階で、ロールプレーをするなどして、楽しみながら発展的に学習することができる。

教材作成に当たっては、Adobe Flash Player で動くアニメーション(swf.)を使用した。絵本の背景をそのままスキャニングして利用し、金魚の部分を取り抜き加工した。加工用ペイントソフトは、マイクロソフト社「ペイント」を使用した。金魚をオブジェクト(部品)とし、場面移動の動きを加えた。文章の読み上げには、チャンツの形式を取り入れた。使用したチャンツは、音楽制作ソフトによってリズムを発生させたあとに、「語り」をかぶせる形で録音して制作した。

今回の研究では、児童は絵本をアニメーション化した教材で楽しく学べ、英語の音声にも興味を持ちながら学習に取り組んだことが、アンケートから明らかになった。しかし、以下のような問題点も浮かび上がってきた。

- ① チャンツの内容と英語のリズム、アニメーションの動きのタイミングの調整には教材作成の一層の正確さを求める必要がある。
- ② 児童と教材のインタラクティブ性については、さらに工夫・開発の余地がある。

今回の発表では、特に「英語の強勢のリズム」と伴奏のタイミングの関係についての分析を通して、問題点の解決方法の提案を試みたい。



# 教員向け授業支援 iPad アプリ“Yubiquitous Text”の開発

樋口 拓弥（関西大学・学部生）

キーワード：iPad 授業支援アプリ リスニング 教室内 開発理念

## 1. iPad 用アプリ “Yubiquitous Text”

“Yubiquitous Text”は発表者の卒業研究の過程で開発し、現在テスト中の iPad 用アプリである。主にリスニングの授業中に教室内で使われている CD や DVD に代り、iPad 1 台を補助的に使用して授業を行うことを想定している。通常のプレーヤーにあるような再生、停止といった機能の他、音声のスクリプトを読み込んでおくことで、テキスト中の指でタッチした部分から再生することができる。また、復唱練習やシャドーイングに適した再生モードも用意されている他、Apple の提供しているアダプターや Apple TV などを用いることによって、テレビやプロジェクターなどの外部ディスプレイに有線・無線接続でビデオやスクリプトを出力することができる。これは今後更に発展していくと考えられる普通教室での IT 機器（TV、プロジェクター、電子黒板、無線 LAN など）の設備度合いによって、より先進的な授業環境を構築するための試験的内容も含んでいる。このように、「いつでも、どこでも」(Ubiquitous) といった利便性と「テキストを指でタッチする」という機能性を合わせて、“Yubiquitous Text”と命名した。

## 2. 開発理念

“Yubiquitous Text”は、教育現場用のアプリにおいて重要であると考えられる 2 つの理念に基づき開発が進められている。

### 2.1 低コストを徹底し、汎用性が高いこと

このような授業支援ツールの多くは、多額の導入費用、保守費用を必要とし、教育現場の負担は大きなものであった。そこで本アプリは無料で提供することとし、外部の業者への委託などは行わず、全てを自己開発し開発コストを下げた。開発にあたっては、普及率の高い iPad 用の無料のアプリとすることで、iPad を既に所有している教員によって活用することができるようにした。また iPad は最新型の製品 (iPad mini など) 以外にも、旧製品 (iPad 2 など) が安価で販売されている現状に鑑み、旧製品でも使用できるようにして汎用性を高めた。

### 2.2 開発者中心ではなく、現場の使用者目線での開発を行うこと

最終的に教育現場で使用する人の意見よりも、開発者の意図が反映されてアプリが作られていくことを防ぐ意味でも、本アプリは自己開発にこだわった。その際まず開発の第一段階として、現在大学で英語の授業を担当している教員や将来教員を目指す学部生の意見を反映しながら開発を進めた。このとき不要な機能をなるべく実装せず、必要最低限の機能を削り込んで作成してきた。今後行われる第二段階での開発では、より広い範囲でベータテストを行い、そのフィードバックを元にアップデートを繰り返していく予定である。

当日は第一段階での開発を終了した “Yubiquitous Text” のデモも用意している。

## 日本人英語学習者による絵描写発話タスクにおける繰り返し効果： ポーズに注目して

杉浦 香織（立命館大学）、泉 恵美子（京都教育大学）、斉藤 倫子（関西学院大学・大学院生）、堀 智子（国立東京工業高等専門学校）、森 庸子（同志社大学）

キーワード：反復効果 絵描写発話タスク 流暢性 ポーズ 日本人英語学習者

第二言語の発話流暢性は、言語知識の使用が手続き知識化されることで生じるとされている。これは、主に反復学習により、言語知識の検索・保持がスムーズになり、認知負荷が軽減されることで生じる。本発表では、第二言語学習者が絵描写発話タスクに繰り返し取り組む間に、流暢性、特に、ポーズ（サイレントポーズとフィールドポーズ）にどのような変化が生じるかについて実証研究報告をする。

我々が行った発話流暢性に関する先行研究(Saito et al., 2012)では、日本人英語学習者は発話タスクの反復により、発話速度と平均発話長の面で流暢性は向上するが、サイレントポーズは減少しない傾向が明らかになった。ただし、発話におけるサイレントポーズの出現位置に注目した先行研究によると、第二言語学習者の発話は流暢性が増すと、統語境界内のポーズ数は減少することが報告されている (e.g., Segalowitz & Freed, 2004)。本研究では、発話タスクの反復学習により、サイレントポーズとフィールドポーズがより統語境界に置かれるようになるのか、さらに、フィールドポーズに伴うサイレントポーズは減少するのか、出現頻度と長さの観点から検討した。

参加者は、日本人大学生、計 40 名（男性 21 名、女性 19 名）である。英語熟達度レベルは Oxford Quick Placement Test で測定し、平均 60 満点中 38.8 点 (CEFR レベル A2:1 名, B1:24 名, B2:9 名, C1:6 名) であった。発話タスクとして、参加者には、6 コマ漫画 (Heaton, 1966, 1975) を提示し、3 分間の発話プランニング時間を与えた後、3 分程度で 3 回続けて漫画の内容を英語で描写するように求めた。音声データは Audacity で録音し、Praat を用いて書き起こした。その後、1 回目と 3 回目の発話において、ポーズの位置（文・節間、句間、句内、接続詞との共起）のタグ付けをした。

主な結果は以下の通りである。

- 1) サイレントポーズについては、文・節や句間での出現頻度に変化はなかったが、句内と接続詞後での出現頻度が減少し、長さも短くなる傾向が見られた。
- 2) フィールドポーズについては、文・節間のポーズの出現頻度が減少し、長さも短くなる傾向が見られた。
- 3) サイレントポーズとフィールドポーズの共起については、サイレントポーズを伴わないフィールドポーズが短くなる傾向が見られた。

以上、発話タスクの反復により、サイレントポーズがより統語境界に置かれ、且つ、短くなること、フィールドポーズは統語境界での出現頻度が減少し、短くなること、さらに、サイレントポーズを伴わないフィールドポーズが短くなることで、流暢性が向上することが示唆された。本結果は、反復効果により、言語産出プロセスにおける語彙や統語構造の検索・保持がスムーズになったことによるものと考えられる。

# 英語および日本語のリズムの違いと共通点：

## 音声教育への示唆とともに

東 淳一（順天堂大学）

キーワード：Final-lengthening 言語リズム 統語構造

米国人による 3 種類の英語発話を音声分析ソフト WaveSurfer で分析し、単語ごとに継続時間を測定した。発話は *The Parks will clean the trees.* のように 3 つの内容語を含む。3 つの内容語は当然ながらストレスがおかれ、継続時間も長い。従来の内外の韻律研究でも明らかになっているとおり、今回の分析でも文末の内容語が最も継続時間が長く、いわゆる **Final-lengthening** (以下 **FL**) が明確に観察された。なお、文構造に関係なく、ほとんどの場合 3 つのうち 2 つ目の内容語の継続時間が最も短く、次に長いのが 1 つ目の内容語であった。上記の英文の場合、*Parks* の平均継続時間は *trees* のものと比較して 74% であり、*clean* については 60% であった。ストレス間の間隔 (*inter-stress interval*) も精査する必要があるが、**FL** の 1 つ前の内容語が相対的に短く発話されるという結果は特筆すべきことであろう。

さらに今回は「川野が刈谷でカメラを借りたよ」のように日本語の数文節からなる短い発話も WaveSurfer で音声分析し、文節の継続時間を考察した。具体的には文節のみの単独発話継続時間を基準に、文発話での各文節の継続時間の伸長度を分析した。その結果、後に深い統語境界がある文節は相対的に長く発話され、文末の文節は最も伸長度が大きいことがわかった。強固なモーラリズムがありモーラ長は容易に伸縮しないと考えられている日本語においてもフレーズ末あるいは文末での若干の継続時間の伸長が観察されるということは、言語リズムの普遍性を示唆するものであろう。なお、継続時間の伸長が顕著な文節の直前では、継続時間が相対的に短くなる傾向があり、統語構造とは関係なく文節長の相対的な継続時間が「短長短長」のパターンをなす文もあった。今後精査が必要であるが、いわゆる **FL** 的な現象が観察されるフレーズの直前では継続時間が短くなるという現象も英語、日本語両方に観察されているということは強調されねばならない。

以上の分析結果から、外国語としての英語の音声指導においては特に文末での継続時間の引き延ばしを強調することが推奨される。また、外国語としての日本語教育においても、特に朗読やスピーチなどの指導場面で、文末や深い統語境界で意識的に継続時間の引き延ばしを行うことで発話をより自然かつ芸術的に聞かせることができることを学習者に体得させることが必要であろう。

\*本報告は平成 23 年度～平成 25 年度科学研究費挑戦的萌芽研究「日本語の統語構造は発話のタイミング制御を規定するか」（課題番号：23652095）による助成を受けて実施された研究の一部である。

## Causal Transcriber を使った音声教材の準備と提示

今尾 康裕 (大阪大学)

キーワード：アプリケーション開発、教材準備、リスニング

インターネットで無料の音声・映像素材が簡単に手に入るようになり、素材の選択の幅が教科書に付属する音声素材以外にも大きく広がった。ただ、教科書に付属の素材を含めて、授業で思うように使うためには、相応の準備が必要となる。特に、スクリプトが用意されていない素材を使う際には、音声を聞きながら文字に書き起こしてスクリプトを作る必要があるが、書き起こし作業の環境が整っていないければ、メディアファイルの操作などに手間がかかり、聞き取ることに集中するのが難しい。

Mac 用の文字起こし補助アプリケーションである **CasualTranscriber** は、もともと、大学の ESL 教員の声に答えるために、文字起こし作業の負担軽減を目的として開発を始めた。基本的には、リッチテキストファイルを扱う簡易テキストエディタアプリケーションで、音声・映像ファイルを読み込んで、アプリケーション内でメディア再生を制御しながら文字起こしを行うためのものである。メディア再生の制御はボタンだけでなく、任意のショートカットキーを割り当てることができるため、キーボードから手を離すことなく作業を続けることができる。また、エディタ上でリンク付きのタイムスタンプを挿入し、それをクリックすること、指定の再生位置に瞬時に移動できる機能もついている。これを利用して、授業で音声・映像素材を利用する際に、希望する箇所に瞬時に正確に移動し、再生することができる。

これらに加えて、タグの挿入、繰り返し入力される文字列の短縮入力、特殊文字の登録および簡易入力など、教材準備の補助となる機能がついている。また、実験的な機能として、YouTube の映像を扱う機能、メディアファイルの簡易編集機能、チャプターマーカーの挿入、データベース機能、字幕挿入機能などを用意している。これらの実験的な機能を組み合わせることによって、リスニング中心の授業でなくても、音声素材を授業で利用することを容易にし、持っているリソースを最大限に活用できることを目指している。

本発表では、開発の背景と基本的な機能の紹介した上で、コンピューターに取り込んだ素材を読み込んでの文字起こし作業から、授業などでの音声・映像素材の使用に至るまでの簡単なデモンストレーションし、日々の教材準備などでどのように使用したら良いかを考える。また、データベース機能と字幕挿入機能の現状と今後の開発目標などについても論じる。

## 偶発的英語句動詞学習 “PAC 分析を通じて”

山形 悟史（大阪教育大学・大学院生）、吉田 晴世（大阪教育大学）

キーワード：Core Image, Incidental Learning, Notice, PAC Analysis

英語句動詞（以下、句動詞）はそれぞれの持つ意味の広さと、構成要素である動詞とパーティクル（前置詞・副詞）の組み合わせからは容易には想像のできない意味を産出するところから、多くの英語学習者にとって難解な学習項目となっている (Condon, 2008; Richard, 1990)。

近年は認知言語学の知見を活かして、国内外を問わず多くの研究者が、ネイティブスピーカーの持つ言語概念を視覚的なイメージへと表象し、語彙、文法項目への教育に応用しているが、句動詞学習もその例外ではなく多くの研究がなされている (田中, 2011; 中川・土屋, 2011)。中川・宮口・桃井 (2011) や Takahashi and Matsuya (2012) などでは、学習者とその句動詞の持つコアイメージを視覚的に捉えることにより、形式からのみでは予想不可能な意味の理解を促すことができ、句動詞の学習に有効であることが示された。

本研究では、句動詞のコアイメージが学習者に習得される過程を、画像を用いた英作文トレーニングの観点から改めて捉え、学習初期に意図的学習に依らずして句動詞がインプットからインテイクの処理へと移行されるかについて調査することを目的としている。句動詞そのもののコアイメージを具現化した動画と、その句動詞が用いられる英作文を再現する課題とを組み合わせたインタラクティブな教材作成支援フリーウェアソフト Hot Potatoes Version 6.3.0.5 (2012) にて試作し、8名の参加者に体験してもらった。併せて、各種テスト、内藤 (1997) による PAC 分析 (Personal Attitude Construct) を受験してもらい、句動詞の問題を解くストラテジーがどのように変化したか、また句動詞の記憶は長期記憶へと保持されるか、そしてインタラクティブな課題でどのような心的処理がなされていたかを検証した。

結果として、タスク前後でのストラテジーの変容に顕著な変化は見られず、直後テストの結果からも、句動詞の学習への顕著な効果は見られなかった。しかしながら、PAC 分析の結果と直後テストの結果を参照すると、何らかの原因で動画に注意を向けられた参加者、また英作文に対して困難な感情を抱いていた参加者においてのみ、直後テストとの間に関係が見られた。

本研究から分かったこととしては、タスク設計が参加者の英語熟達度にそぐうものではなかったこと、句動詞そのもののコアイメージを一度に掴むことは難しいこと、注意を動画に向けた参加者はすでに有していたコアイメージを正しい形式に反映できうること、参加者の大半がインテイク、つまり仮説形成までは至っているものの、それ以降の統合過程にまでは至っておらず、中間言語には取り込まれていないことなどが挙げられる。今後の方向性としては、句動詞の動画提示の方法の工夫、タスクディマンディングとの兼ね合い、句動詞をより受容的、産出的な知識へとするためには適切なフィードバックをインテイク後に与えることが必要であるという示唆が得られた。

## 大学の英語ライティング授業における TBLT の導入

浦野 研（北海学園大学）

キーワード：TBLT ESP ライティング

日本の大学英語教育においても English for Specific Purposes (ESP) の考えが浸透しつつあり、大学卒業後のニーズに基づいた英語科目が設置されることも珍しくない。また、社会における実践的な英語コミュニケーション能力を想定するとき、「取引先からの英語の電話に対応できる」、「英語のマニュアルを見ながら新しい機器を使うことができる」といった具体的なタスクを目標として設定することが可能なため、ESP 教育は task-based language teaching (TBLT) との親和性も高い (Long, 2005)。そこで本発表では、大学 3 年生を対象にした半期 15 回の英語ライティング授業において、状況に応じた英文ビジネスメールを書くことを目標にして TBLT を導入した事例を報告する。初回 (オリエンテーション) を除いた授業の流れはおおよ次の通りである。

### <授業前課題>

1. 担当教員が毎回用意したシチュエーション (告知、依頼、引き合い、見積もり、苦情、謝罪等) に応じた英文メールを書き、担当教員に送信する。

### <授業>

1. 前回の課題へのフィードバック。添削済みのメールを返却し、確認すべき点を伝える。
2. ピア・フィードバック。3 名程度のグループに分かれ、互いの授業前課題を批評する。
3. 全体フィードバック。1 名分の課題をクラス全体で批評し、教員がフィードバックを与える。
4. グループ・ライティング。次の授業前課題と同じ目標タスクでシチュエーションのみ異なるライティング課題にグループで取り組み、担当教員に送信する。
5. 教員によるフィードバック。グループ・ライティングをスクリーンに投影し、次回課題で注意すべき点を中心にフィードバックを与える。

### <授業後課題>

1. 授業でのピア・フィードバック、全体フィードバックを参考に、一度提出した課題を修正して再提出する。締め切りは授業 2 日後。
2. 次の授業前課題。締め切りは次の授業前日。

本実践では、task-repetition (e.g., Bygate, 1996; Gass, Mackey, Fernandez, & Alvarez-Torres, 1999) の考えを援用し、授業前後の活動として同じライティング・タスクを繰り返させている (正確には 2 回目は 1 回目のタスクの修正を行わせている)。さらに 1 回目のタスク実施の前には、同じ目標タスクでシチュエーションのみ異なる課題を授業内にグループ・ワークとして実施することで、それぞれの目標タスクについて計 3 回ライティング課題に取り組む形式としている。

発表では、実際に使用したタスクの事例と学生が書いた提出課題 (修正前と修正後) を紹介しながら、授業の進行方法について詳しく報告する。

## 学習者の自律的な推敲を促す自動添削ツールの検討

大澤 真也 (広島修道大学)

キーワード：ライティング Criterion Moodle 推敲 自動添削

ライティング指導においてどのようなフィードバックをどのタイミングで行うかは重要な課題であり、多くの研究者によって議論が行われている。その中で注目を集めつつあるツールの 1 つに、ETS が開発した Criterion がある。これはライティング指導の効率化を目指したもので、エッセイを入力することにより短時間で全体的評価と Grammar、Usage、Mechanics、Style、Organization & Development の 5 つの項目において誤りに関するフィードバックを提供してくれる。発表者は 2010 年より Moodle と Criterion を活用して、ライティングの授業における学習者同士のやり取りおよびエッセイの自律的な推敲を促すことを目指した授業を実践している。

今回報告するのは地方私立大学英语英文学科の 1 年生を対象として開講されているライティングの授業である。主なねらいは「文レベルにおける正確さを追求し、最終的にはパラグラフレベルの文章を書けるようになる」ことであり、2 年生の時に開講される関連科目においてエッセイを書けるようになるための基礎固めを目指している。そこで発表者が担当する授業においては、授業内において学習履歴管理システムである Moodle を利用し、オンラインで学生同士のパラグラフレベルの英語のやり取りを促進する活動を数多く取り入れている。また半期 15 週の間回数を取り、Criterion を利用してエッセイを書かせる活動も取り入れている。しかしながらあくまでもこの活動は付随的なものであるため、できるだけ少ない教員からのフィードバックで学生が自律的かつ効率的にエッセイを推敲してくれることを期待している。その結果、Criterion の自動採点による 6 段階の全体的スコアは平均 1.59 (SD=0.57) から 3.79 (SD=0.98) に上昇し、流暢さの指標として取り扱われることの多い総語数においては個々のばらつきが大きいものの平均 112.86 (SD=35.67) から 356.76 (SD=173.56) に増加した。

このように Criterion や Moodle などのツールを活用することによって、学習者が自律的に推敲を行うように促す手助けをできる可能性がある。発表当日は、その他の指標も利用してさらに詳細な分析を行った結果を報告するとともに、Criterion の他にオンラインで公開されているライティング分析システムも紹介し、利用可能性について検討したい。





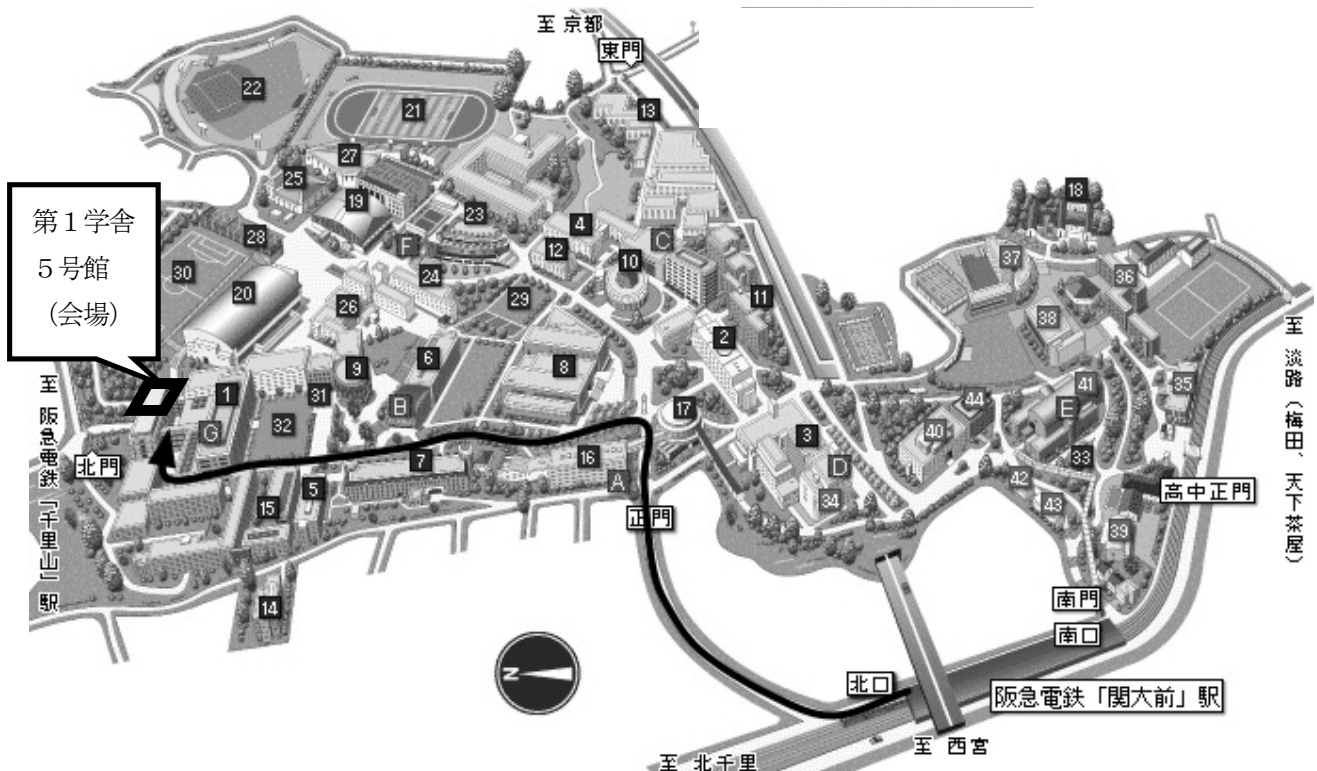
## お知らせ

- 参加者は、受付にて必ず参加登録票にご記入のうえ、ネームホルダーをお受け取りください。LET 会員は無料です。非会員の方は当日会費 2,000 円（大学院生は、学生証を提示していただくと 1,000 円）を受付でお支払いください。また、学部生は無料でご参加いただけます。なお、支部大会当日にご入会いただくことも可能ですので、支部事務局（受付）までお申し出ください。
- 当日は、学内の食堂が営業しております。ご利用ください。
- 館内は全面禁煙です。
- 懇親会は第 1 学舎 1 号館 1 階の「不二家食堂」にて開催いたします。参加費は 2,000 円（学生 1,000 円）です。当日、受付にてお申し込みください。

## 会場への交通案内・会場案内図

### ■阪急電車をご利用の場合

阪急電鉄「梅田」駅から、千里線「北千里」行で「関大前」駅下車（この間約 20 分）、北口出口より徒歩約 10 分。または京都「河原町」行（通勤特急を除く）で「淡路」駅下車、「北千里」行に乗り換えて「関大前」駅下車。



学内には駐車スペースがありませんので、必ず公共交通機関をご利用ください。



# ATR CALL BRIX

ATR Computer Assisted Language Learning System

目的に合わせて、効果的な学習ができる！ 英語学習 eラーニングシステム

**内田洋行** 教育ICT・環境ソリューション事業部

環境マネジメントシステム規格 品質マネジメントシステム規格  
**内田洋行は ISO14001・ISO9001 認証取得企業です。**  
●東京地区オフィス(新川オフィス・清瀬オフィス・東横町オフィス)  
 ●マーケティング本部 ●大阪支店 ●北海道支店 ●九州支店



ウチダホームページアドレス ▶ <http://school.uchida.co.jp/>

東京 〒135-0016 東京都江東区東陽2-3-25 東日本大学営業部 ☎ 03(5634)6441  
 ICT東日本営業部 ☎ 03(5634)6402  
 仙台 〒983-0852 仙台市宮城野区福岡2-4-22 仙台東口ビル6階 ICT東日本営業部 ☎ 022(292)2783  
 札幌 〒060-0041 札幌市中央区大通東3-1 北海道営業部 ☎ 011(214)8630  
 大阪 〒540-8520 大阪市中央区和泉町2-2-2 西日本大学営業部 ☎ 06(6920)2632  
 ICT西日本営業部 ☎ 06(6920)2641  
 名古屋 〒460-0003 名古屋市中区錦2-2-2 名古屋丸紅ビル13階 中部営業部 ☎ 052(222)7234  
 福岡 〒810-0041 福岡市中央区大名2-9-27 九州営業部 ☎ 092(735)6240